施工者に幸あれ 第122回

# エスプリの効いた柔らかい構造を

## 構造家・金田充弘

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

### ■構造へと

少年の雰囲気と面立ちを残した東京藝術大学美術学部建築学科教授の金田充弘さん。国際的コンサルティング・エンジニアリング組織のArupのビルディングエンジニアリングのディレクターとしての方が知られているかもしれない。1970年東京に生まれ，それから埼玉県の狭山市へと移る。高校から留学したのは親戚の人が住んでいるカナダ。その後，名門のカルフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部建築学科に進んだ。同大学の工学部土木環境工学科修士課程を修了。日本人の構造家としては少し変わり種の経歴です。どこで構造設計とリンクしたのか？学生のアルバイト時代に感じた「つくるプロセスの面白さ」だったという。描いている線がリアルになっていく過程で，ものづくりのフラストレーションが解消された。工学部の建築学科でなかったことは，「構造を生業とするのにはよかったと思う」と。ただし，エンジニアになるなら絶対ハードコアなエンジニアリングをしっかり学ばないといけない。「その基礎がないと，実務で楽しいことはできないのだ」とも語る。

### ■建築家とコラボレーション

レゾノ・ピアノは好きな建築家で，設計に対する姿勢に惹かれ，いつか一緒に仕事がしたいと考えていた。就職するに当たり，Arupのサンフランシスコ事務所で面接。Arupのロンドン事務所での勤務を希望したが，ビザの関係で1年間は東京事務所で働くことになった。その後，1997年にロンドンArupに移ってから念願のレゾノ・ピアノとセシル・バルモンド（現副会長）と協働することになる。Arupでは一人の建築家の担当者になるとそれが続く。銀座の風景を一際高めた「メゾンエルメス」は金田さんが担当したのは必然だった。建物すべてが基礎に固定されてなく，一部浮き上がっていいつくりだ。細長い建物にかかる曲げの力に抗わない，地球と戦わない構造。浮き上がる側の足元に，揺れを吸収する水飴のような粘弾性ダンパーがある。建築はすべて基礎についていないといけないという考えが変わる，未来への可能性を秘めた構造なのです。

ロンドン事務所勤務の後，東京事務所に戻りかかわったのが「ぎふメディアコスモス」（設計：伊東豊雄建築設計事務所）。2階の床面までは鉄筋コンクリート造，2階の鉄骨マリオン柱と外周のT型柱で木造屋根を支持している複雑な混構造の建物だ。特に，木造の屋根には小さい材を積層して使う提案から始まり，デザインにも貢献できたと思うと語るのです。

### ■研究室の風景

東京藝術大学の金田研究室には，明るい光が射している。静かに集中している学生たちにも，自由な雰囲気が広がる。広いテラスには課題を形にした作品の数々。金田教授は楽しそうに一つひとつを説明してくれる。棚には面白い形の模型や研究段階の大小の材料が並んでいて玩具箱のようだ。金田さんが手中で揺らすステンレスの材も研究段階の構造材だという。透明感のある紙のような金属も近い将来構造材となる。サンドペーパーに似た炭素材も未来を担う構造の素材なのです。

東京藝術大学名誉教授だった亡き建築家の六角鬼丈さんが，金田さんを東京藝術大学へ誘ったという。気鋭の建築家だった六角鬼丈さんは，歳の離れた構造家に何を託したのだろう。

次世代の構造家を育てる金田充弘教授のつくる研究室の環境が，その答えかもしれません。